

坂戸工作所③

北野靖志の『元氣が行く』

現場レポート・元氣印経営の秘密

今、売れに売れている油圧解体機にはちよつとしたキツカケがあった。

はいかなかった。大型の機械式クレーンからウインチをはずして油圧装置を載

た。途方に暮れていた坂戸にあるとき、耳寄りな情報が

《坂戸工作所》

社長＝坂戸誠一氏
住所＝千葉市花見川区
☎043・259・0131
業種＝解体機械製造業
資本金＝5720万円
設立＝1945年4月
従業員数＝30人
年間売上げ＝9億円

れんが壊し機みて直感

油圧解体機誕生③

かねて油圧ショベルの先に圧碎機をつけられないものか―と考えていた坂戸誠一は二つ返事で応えた。

「やってみよう」

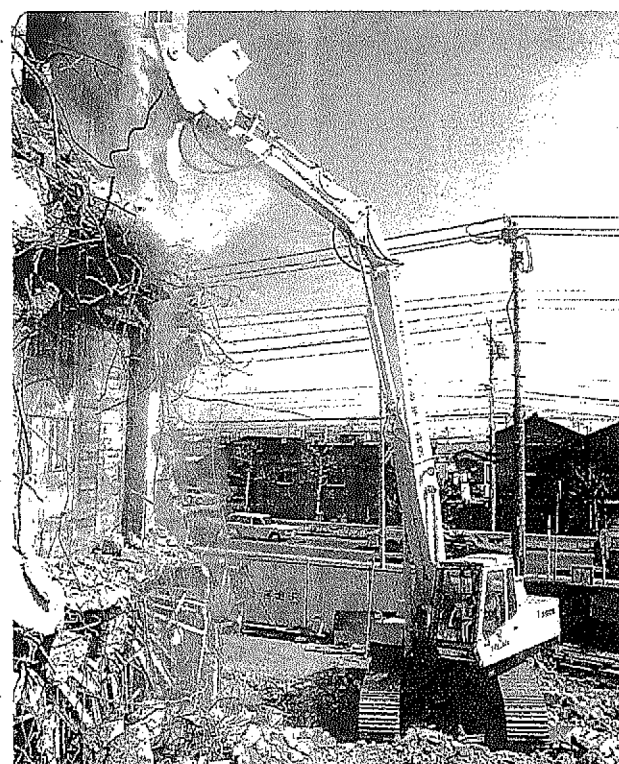
解体業者は中古の油圧ショベルを持っていた。壁壊し、杭抜きなどいろいろなアタッチメントをつくって

きたが、どれも思うように

せ、自前の油圧ショベルに改造、重量が五トあるプレス機械のような構造の解体機械をつくったこともあ

る。いろいろなタイプのアタッチメントをつくっては解

用に壊す機械のようだが、日本でも使い道がありますかね」



79年ごろからビルや大型構造物の解体工事ではスチールボールに代わって、油圧解体機「ベンチャー」が普及し始めた

坂戸は早速、展示会にか

けつけた。れんがの建物はれんがをモルタルでつなぎ

合せてつくる。この機械はれんがをつかみ、機械を前後に回転させることで「ボキッ、ボキッ」とえぐ

れ

しかし、「サンプルで売

た。油圧ショベルは二千五

百万円もしたし、れんが壊

し機と合わせると三千万円

もの出費となった。その

夜、社長である父、正四郎

にいきさつを報告したが、

一言も怒らなかった。

（論説委員長）